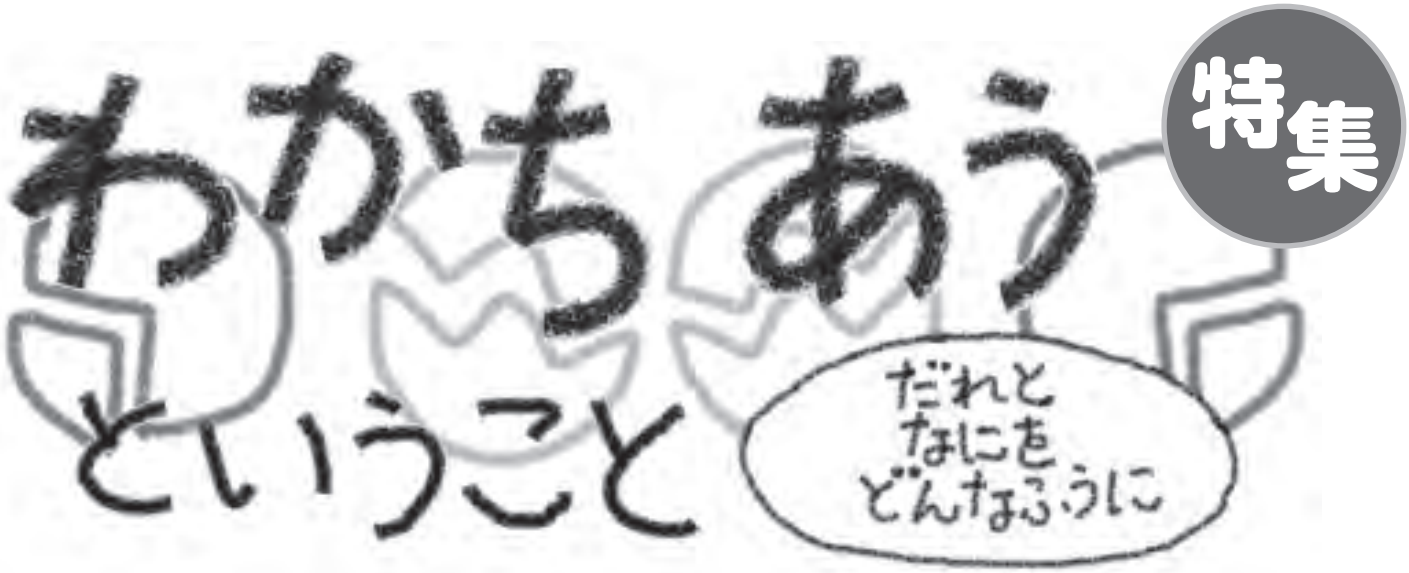


実例1

ハウスシェア
地域にひらく共有スペース

自宅を建て替える時に、グループリビングという形の住宅を作った華山喜三代さんを訪ね、お話を聞きました。

○なぜ、グループリビングという形の住宅を作ろうと考えたのですか？

●介護付マンションを購入したけれど満足していないという話を何度か聞きました。高齢になっても安心して一人住まいできる良い方法はないかと考えました。また、複数の医師に高齢者の一人暮らしで心掛けることは何か、と質問したところ「毎日一回他人と話すこと」と、どの人にも言われました。そこで、プライバシーがあり、共有スペースもある住居作りを考えたのです。

華山さんが当時作成したチラシには次のような説明があり、目指すスタイルがわかります。

「エーデルハイム・小平」とはケアハウスではありません。最後まで自立して、自分らしく生きたいと願う高齢者の一人暮らしを、居住者の互助によって支えていくことを目標とするグループリビングです。

そのために、全員がお互いの「プライバシー」を尊重すること、その上で「助け合い」の必要なときには、できる限り協力することを居住の基本的条件とします。

○一緒に住む希望は多かったですか？

●自室の他3室作りましたが、当初3人の希望者がいました。が、その後二人が病気になり、もう一人も家の事情で転居してしまいました。その後もたくさんの方が見に来ましたが決まりませんでした。去年も、仲良しのお二人が一部屋ずつ希望されましたが、それぞれ家族に反対されて諦めてしまいました。

○高齢者の一人住まいはハードルが高いようですね。金額はどのくらいですか？

●年金で暮らせることを考え低めに抑えています。近所の方がボランティアで何かを世話をしてもらえるようお願いしたので、その謝礼分を入れても十万円以内です。

○現在は学生さんが入居されているのですか？

●結局2年間部屋が空いていたので、今年になって不動産業者に仲介をしてもらったところ、すぐに3室が埋まり、学生たちが入りました。多目的ルームが空いているので時々地域の方に貸しています。少人数のコーラスや小さい音の楽器練習、ちょっとした会合など、無料です。

華山喜三代さん

取材を終えて

若者と高齢者が同じ敷地内に住み、毎日挨拶を交わし、さりげなく気遣えるような暮らしはハウスシェアに近いかもしれない。70代後半で伴侶の急死という困難も乗り越えて計画を実現した華山さんは、安心して暮らせる住居モデルを提供してくれているように思う。こうした建物が増えれば、高齢者の一人住まいのハードルが低くなるだろう。

実例2

オフィスシェア
シェアは楽しい♪

映像やデジタルコンテンツを制作するミミル山房の小山晃さんと、撮影旅行や介護旅行を手がけるトラベルケアの上野淳二さんは小・中学校の同級生。5年前に小山さんが西国分寺にある自宅をリフォームして、ミミル山房の分室を立ち上げた時から一緒にオフィスをシェアしている。

「何か一緒にできたら…」と軽い気持ちで誘ったという小山さん。長続きのコツは?と訪ねると、「それぞれが、それぞれの仕事をすること」とさらりと答えた。

制作会社と旅行代理店という全く異なる業種というのもユニークだが、そのシェアスタイルもとてもユニークだ。約24畳ほどのワンルームには、仕切りは全くなく、ドアは入口とトイレにあるのみ。コンクリート打ちっぱなしの壁に沿って手作りのシンプルな木製の机があり、両社のスタッフは各々自分の場所で仕事をする。そのゆるやかな感じが、何ともいい雰囲気なのだ。シェアする上で困ったことやデメリットを感じる時は?と尋ねても、特にないと答える小山さんと上野さん。逆にメリットは?との問いには、「人脈というか、知り合いの幅が広がった」と小山さんが答えると、「全く違う仕事だからこそ気がつく課題や参考になる意見が聞ける」と上野さんが続く。単純に経費節約だけではなく、そのメリットは多いようだ。

中学卒業後は特に連絡を取るということもなく、再び交流が始まったのは社会人になってからのことだったというお二人。社会人として経験を重ね、お互いがお互いの仕事や人格を尊重しているからこそ、特にルールを定めなくてもうまくいっているのではないかと、豪快に笑い合う姿を見ていると自然に思えてくる。

最後にこれからオフィスシェアをする人へのアドバイスは?と尋ねると、「疲れない相手を選ぶこと」とのこと。まるで答えだけを聞いていると、結婚相手を選ぶ時のようだ。しかし、改めて考えてみれば自分の家族よりも一緒にいる相手なのかもしれない。

部屋の中央に据えられたミーティングテーブルで、小山さんが入れたコーヒーを飲みながら、旅行から帰って来たばかりの上野さんの話を聞く…。そんなひとときがお互いにとって、最高のリフレッシュタイムになっているようだ。

共通点も多く何となく雰囲気が似ている。
小山晃さん(右)と上野淳二さん(左)。

実例3

喜びのわかちあい
おもちゃの病院

来年(平成24年)4月に開院10周年を迎える病院がある。といっても人間を治療する病院ではなく、壊れたおもちゃを修理してくれる病院。その名を「小平おもちゃの病院」という。

福祉会館で、月2回、土曜日の午後1時~3時半、外来診療をしている。この病院で修理されたおもちゃの完治率は95%。ここのドクターの腕はいい。おもちゃを手軽に治せる技術とノウハウ、そして必要な部品や道具を合わせ持ったプロ職人ばかり。だが、これは仕事でなくてボランティアなのだ。

だから、健康保険証がなくても診察料、治療費は無料。部品交換をした場合の手術料が50円から、その場で修理できない重病の場合の入院費が100円と、信じられないくらい安い。それでも、ドクターがいつも持ち歩いているリュックには、部外者には使い方がわからない修理道具や部品が300以上も入っており、必要なら、かつて勤めていた会社の工場まで行って部品を加工してくる。

それもこれも、修理が終わって「ウワー、動いたぁ」と飛び上がって喜ぶ子どもの笑顔が見たくてやっていること、とドクターたちは言う。それは正に喜びの分かち合いである。

実例4

みんなが集まるへや
コミュニティカフェ
CHAMBRE(シャンブル)

小平霊園際の蟹谷さん宅の玄関はそのままカフェになっています。1週間のうち4日間、それも12時から17時まで開店するカフェです。「みんなが集まるへやになればいい」とつけたCHAMBRE(＝部屋)の名前の通り、地域の人たちが入れ替わり立ち替わりやって来ます。

家族の話、自然食のこと、遊びの計画、相談事などで話が尽きないグループもいれば、「蟹谷さんがいるから来るの」という人もいます。一人暮らしのお年寄りが「○○さん、いる?」と、ご近所の顔を探しながら入ってきます。月に1回、近くにある高齢者施設の人たちもボランティアと一緒にお茶を飲みに来ます。日替わりのランチとケーキ、コーヒーで時間いっぱい滞在する人もいます。ランチは、タニタの社員食堂メニューを取り入れるなど工夫しています。ケーキは知人の宮田さんが材料に気を配って作ります。「おいしそう。絶対食べる」と言われるほどの人気です。

人は人と話をすると元気になります。知っている人に会えるとうれしいと感じます。その時お茶とお菓子があればいいし、お昼もあればなおいい。蟹谷さんは、ご両親の介護で実家に住むようになって、気分転換のために好きな仕事だったカフェを始めたそうです。「地域の人たちが集まる、情報が集まる、コミュニティカフェがあちこちにあるといいと思います」と、蟹谷さんは話しました。

実例5

エシカル ジュエリー
「HASUNA」が取り組む
フェアトレード

第二次世界大戦後、欧米から起こった運動、日本では平成14年の後半から動きが活発になりコーヒー、紅茶、チョコレート、衣類、サッカーボールなど扱われる商品も増えている。中でも注目されているのが、平成21年に設立された『HASUNA』で、エシカルジュエリー（ethecal jewelry）をフェアトレードしている。エシカルとは倫理的に正しいと言う意味で、環境や社会に配慮した素材を使ったジュエリーをエシカルジュエリーと呼ぶ。紛争や搾取の結果得られた原石を使わないことや金・プラチナをリサイクルして使ったり、フェアトレードで仕入れた素材を使って制作している。ルワンダの紛争孤児たちが削って磨いた牛の角のジュエリーは、『ルワンダコレクション』として発表され、ルワンダのストリートチルドレンの支援になっている。

また、ミクロネシアの若者達の自立支援策としてこの地方特有の真珠を養殖するプロジェクトに賛同し、この真珠を使った『ミクロネシアコレクション』を発表している。

このように途上国の人々が支援を受けるだけでなく、自分たちの手で幸せを手に入れることができるよう、彼らが作ったジュエリーを正当な価格で買い取り製品にする。ジュエリーと支援という意外な組み合わせが、これからのフェアトレードをさらに幅広いものにしていくのではと期待されている。

足りない毛布

東日本大震災の被災地で、配られるはずの毛布が人数分なかったため配られず、凍死者がでたという話を聞きました。『一人にひとつずつ、わたしだけのもの』私たちの生活の中に、確実に根付いているこの感覚。豊かさの象徴だと思ってきた、この感覚が、当たり前でなくなった非常時には、命を奪うことさえある。

私たちの手の中にあるものは全て無尽蔵に生まれて来る物ではなくて、いつかは尽きてしまうことに、人々は既に気がついています。そして、自分の手の中のひとつの後ろには何十人かの、それを持てない人たちがいること、物は十分行き渡っているのではなく、地球的な規模で偏っているだけなのだと言うことも。

人数分ない毛布は、どうしたら被災した人たちを救えたのか。答えは簡単。みんなで使えばいい。必要な物を必要な人が、知恵を使って共有する。そうすれば得をする人も犠牲になる人もいない、とてもフェアな関係の中で命が守られる。小さな子どもにも分かるこの原理をまた取り戻したい。

アメリカ
カナダ

シェアビジネスが始まったわけ

1907年、2人の若者が金儲けのために、世界で初めて『紙コップ』を発明した。売り込み戦略として2人が考えたキャッチは『使い捨てコップは清潔』だった。自分以外誰の手も触れない、口も付けない紙コップは、結核や天然痘等の感染症を防ぐことができるのだ。

ところが、衛生上優れていることで社会に受け入れられた紙コップが、その後、右肩上がりの経済成長を支える大量消費社会を作ることになった。

それまでの「倹約と再利用」の精神は「たくさん買って使い捨てる」にとって変わり、大量生産、大量消費、雇用は増え労働者の賃金は上がる、人々はその金でまた買い物に走る。まるでゴミを作るために物を作っているような虚しいリサイクルが続いた後、人々は改めて本当に必要な物を必要な分だけ手にする健全な生活を求めるようになった。シェアする時代が始まった。

エアビー・アンドビー

余ってる部屋 貸します

07年、サンフランシスコのデザイナー、ジョー・ケビアとブライアン・チェスキーは、世界会議のために訪れるデザイナーのために、余った部屋の貸し出し広告をその会議のウェブサイトに出した。やってみると1週間で1、000ドル程の現金と思いがけない素敵な人間関係を得ることが出来た。これは商売になると思った2人は08年、泊まる部屋が欲しい旅人と余った部屋を貸したい地元住民とのシェアを提案する小さなサイト『エアビー・アンドビー』を開いた。

そして10年4月現在、このサイトは85、000名近いユーザーが登録し、126か国の3、234都市で12、000余りのホテルではない部屋がアップされている。

ジップカー

車を持たずに車を使う

カーシェアの会社カージップでは、会員がアメリカ国内49都市に加え、バンクーバー、トロント、ロンドンにいて、24時間365日最短で1時間単位からいつでも自動車を利用できる。シェアすることはユーザー自身の得になることであり、罪悪感に訴えたり、自己犠牲を強いることではないという認識を感じてもらうために、09年に『車抜きダイエットチャレンジ』キャンペーンを張った。世界13都市から参加した会員250人（車中毒を自認する）が、車とキーと良心をジップカーに預け、1か月間車に乗らない実験をした。結果は、参加者の財布にも健康にも、コミュニティにも良い影響を与え、250人中100人はもうキーは返して欲しくない、車に乗りたければカーシェアすれば良いと答えたという。シェアすることの見返りは、マイカーの習慣をカーシェアに変える程大きかったことが立証された。

ビクシー　自転車シェア

自転車を持たずに使う

09年5月に始まったモントリオールのビクシー。市内に自転車レーンが増えたのを機に利用者が満足する十分な数の自転車3、000台、低いサービス料金、24時間365日利用できる、300メートル以内、300か所の自転車ステーションを完備してスタートした。立ち上げから4か月で地元ユーザー77、000人を獲得し、その走行距離は350万キロを超えた。

次々に生まれるシェアビジネスのベースにあるのは、シェアを通じて生まれる人間同士のふれあいだ。そして、その全ての関係の中に、親密で暖かいコミュニティが生まれ、ただ単にシェア（共有）し合うだけじゃない、お互いの力を持ち寄ってコラボレーション（協働）するスタイルに進化してきている。人間と人間のコミュニケーション力が、分け合う引き算から持ち寄る足し算に変えていく。そこにはこれまでとは少し違う、豊かな人間関係があり、その魅力がシェアビジネスをさらに発展させていく。

《参考》
『SHARE What's Mine Is Yours シェア〈共有〉からビジネスを生みだす新戦略』
出版社　日本放送出版協会

広報誌『ひらく』聞き取り調査から

平成23年の夏、広報誌『ひらく』聞き取り調査を実施したところ、10代～80代までの74名（男性17名、女性57名）から回答をいただきました。ご協力ありがとうございました。

「分かちあい」のある社会は、“ゆるやかで生きやすい”社会で、互いが“助かる”ことになり“もっと豊かで幸福”につながる、とイメージできるかもしれません。どんなものなら「分かちあう」ことができるのか、「分かちあう」ために心がけたいことなど、様々なご意見をここに紹介します。

『ひらく』を
よく読んでいる
⇒14.9%

小平市男女共同参画推進
条例の内容を知っていた
⇒27.0%

3.11の震災で
自分の中が変わった
⇒87.8%

■「分かちあい」とは？

- 助け合い、協力。与え合う。
- ゆずりあい、思いやり。
- ボランティアや支援、援助。
- 連帯感。
- 人と人とがつながる。みんなで使う。
- 分割のイメージ。
- できる人ができることをやり、互いが認め合ってやること。
- 留学中の学生寮のルームシェア。
- 他人に心をよせ、他人と助け合う人間関係がこれからのシェア。
- 痛み、苦しみ、悲しみ等を、友人等に話し助言してもらうとき。
- 友人から楽しかったこと幸せな話など聞くと自分も幸せになること。
- 昔からある物の貸借、家屋の間貸し等。
- 分担という言葉にも置き換えできる？
- シェア＝物品。分かち合い＝気持ち　というイメージ。
- 社会福祉。お互いが譲り合いながら支えあうこと。
- 目標に向かう協働、やさしさ、理解。
- お給料は下がっても働きたい人が働ける仕組み。

♡すべての生き物に対して。見返りなく共有すること。

■何を「分かちあう」？

- たくさんあるもの、情報、頂き物、食べもの。
- 家事、子育て、仕事。家事・仕事と地域活動。
- 家族と家をシェア。ルームシェア。
- 夫婦で苦労を分かちあうとか。人々のいろいろな思い。
- うれしい情報、寄付、被災地の物資消費。
- 意見や考え、情報と価値観。

♡私たちが納めている税金が必要とする人たちにうまく届くこと。

■「分かちあい」をするためには？

- お互い様を忘れない。
- 人と人のつながり。「ありがとう」の気持ちが大事。
- 遠くの親戚より近くの他人。友達と仲良くする。
- どこで世話になるかわからないのでいつも謙虚でいる。
- 各人が持つ体力、知力、財力などに応じてやる。
- 事前の役割分担ではなく、自然な形で「分かちあう」。
- 分かち合う精神的な土壌を耕す必要がある。
- 心を開放すること、そして受け止める力が必要。
- 一方的ではなく、双方の合意があること。
- お互いを思いやること。
- 人とのつながりから相互理解へ。心が大切。
- 精神面の「支えあい」で絆を強めていく努力。
- 精神、物的両面で他者に役立つような言動をとること。
- 上から目線ではなく差し出す。

♡心が通うって大切。

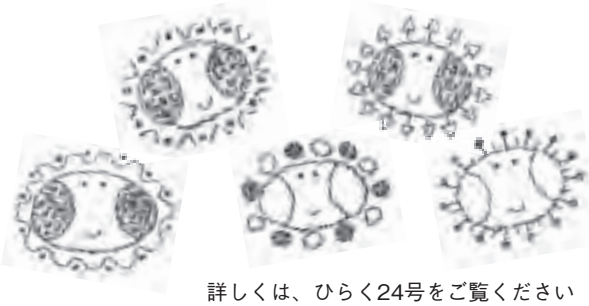
■「分かちあい」、こんな意見もありました

- 気を使うことはやりたくない。
- シェアという言葉には違和感がある。
- 私利私欲な考えを日本の社会全体から変える。まずは自分から。
- 今の人に欠けている大事なこと。
- あえてシェアを言わなくてはいけない社会を悲しく思う。
- 分かち合い＝シェアなのか？
- 「分かちあう」の語感がセンチメンタルなので引きたくなる。
- ともいき（共生）ということばの方がクールな感じ。

確認しよう!

小平市男女共同参画推進条例の7つの基本理念　（平成21年4月施行）

（1）男の人も女の人も、みんなかけがえのないひとり
（2）性別で差別する習わしにはとらわれない
（3）大事なことは、男の人と女の人が一緒に決めたい
（4）個性を大切に人を育てる
（5）男の人も女の人も、家の中、社会の中で大事な一員
（6）からだとココロ、男女のちがいを思いやることから
（7）小平市も世界の動きとつながっている



詳しくは、ひらく24号をご覧ください

『ひらく』の書棚

小平市男女共同参画センター“ひらく”にある本の紹介です。本は借りることができます。

『ルポ 雇用劣化不況』

竹信三恵子・著
〈岩波書店〉
700円＋税

10月29日、ルネこだいらで開催される今年度の「女と男のフォーラム」で、「私の働き方、生き方 発見！」と題する講演をされる和光大学教授の竹信さんが新聞記者時代に書かれた本である。

賃金引き下げ、見えない労働災害、名ばかりの正社員、官製ワーキングプア…など、不況の津波を食らって喘ぐ人たちを働く現場に訪ねて取材し、まとめた本なので実態が目に見えるよう。

でも、この現実を踏まえて私たちは生きて行かなければならない。竹信さんのベストを求めずベターを求める働き方、生き方は、私たちが明日を考えるときの大きなヒントになる気がする。

『若者たちに「住まい」を！ 格差社会の住宅問題』

岩波ブックレット
日本住宅会議編
480円＋税

日本住宅会議は、日本の住居の現状を住む権利の視点から解明し、人間にふさわしい住居を人権として実現していくために活動している。本書は4人の著者が、若者たちの住まいの現状、シェア居住の例、国際比較、住宅政策など、若年層の住まいの全体像を分析し、解決策を提言している。

『女たちが語る阪神・淡路大震災』

ウィメンズ・ネットこうべ
〈岩波書店〉
800円＋税

現状ルポかと錯覚してしまう。平成7年のことなのに。

この本で提起された様々な問題は、この16年でどれだけ改善されたのだろう。東北の地では今も、女性や子ども、高齢者やハンデを持つ人達が、同じ思いを抱き、苦しんでいるのではないか。過去とは思えない、リアルな現実感が辛い。

3・11以降、日本再生、既存の社会システム再構築が叫ばれる。そのために女性の視点は欠かせない。今こそ読むべき一冊だ。後世、この本に断じてリアルさを感じてはならない。

『「普通がいい」という病』

泉谷閑示・著
〈講談社現代新書〉
740円＋税

これはもう「コペルニクス的大転回」だ！

私達は幼い頃から、「邪悪な心は理性でコントロールすべき」「規則正しい生活は大切」と教え込まれ、信じて疑わない。そんな基本的価値観は、根底から覆されてしまう。

精神科医である著者が、豊富な臨床経験を基に、私達の思い込みを一掃。ねじ曲げられた「本当の自分」に気づいた後は、あるがままの自分で人生を謳歌できる!?

『困ってるひと』

大野更紗・著
〈ポプラ社〉
1400円＋税

もし自分が、訳の分からない難病にかかってしまったら・・・。「困ってるひと」は、原因不明の難病にかかってしまった27歳の更紗ちゃんが書いた難病物。

筋膜炎脂肪織炎症候群という、難病にかかった更紗ちゃん。手足は風船のように腫れ、何かに触るたびに激痛が走り、指は潰瘍だらけ、生検の痛みに耐えて検査を重ねても病名は分からず、9か月の検査入院、やっと病名が分かっても、治療法はなく、主治医の経験と勘を頼りに試行錯誤の投薬のかいもなく病状は悪化をたどり、ついにはお尻が腫れて膿がたまり、それが破裂して大きく陥没するという、正に悲惨を絵に描いたような、でもコレは実話。

ミャンマーの難民達を救済すべく東奔西走していたミャンマー女子が、自分自身、まるで難民のようにたくさんの援助を借りなければ生きていけない存在になった現実。一向に先が見えない闘病生活の中で、それでも更紗ちゃんは絶望することなく、難病指定の書類を作り、診療報酬と言う摩訶不思議な制度のおかげで6か月ごとに繰り返される理不尽な退院に耐え、難病仲間の彼とデートをし、自由を求めて引っ越しまでしてしまう。

想像を絶する状況の中で、更紗ちゃんは自分の日常を取り戻すために頑張る。その姿は感動的で、力強くて、少し笑える。日本中の困った人のための精神の特効薬として、是非お勧めしたい。

ひらく広場

原稿をお寄せください

ひらくの記事や表紙の感想、その他なんでもOKです。原稿（500字以内）には〒、住所、氏名（ふりがな、原稿掲載は匿名・イニシャル可）、年齢も書いてください。採用された原稿は文意を変えずに短くする場合があります。

あて先／小平市小川町二丁目1333番地
小平市次世代育成部青少年男女平等課
「ひらく広場」係　FAX 042-346-9200
byodo@city.kodaira.lg.jp

ひらく編集室はあなたにひらいています。

娘の社会科見学

娘が先日、市役所に社会科見学に行きました。普段目にする窓口の他、議会や市長室、屋上まで見れたと大はしゃぎ。嬉しそうに報告してくれました。

「市長さんに、いい質問するねってほめられたんだよ。」

「どんな質問したの？」

「市役所の中で一番偉い女の人は誰ですかって聞いたの。」

「・・・。」

小平では、昨年初めて女性部長が一人誕生したとのこと。娘は、そんな現実よりも「大きくなったら、君が偉くなってね」という、市長の言葉に感激していた様子。

娘よ。あなたが大きくなる頃までに、女性が女性であることを意識せず、普通に働いて、普通に評価される、そんなあたりまえの社会にしなければいけませんね。きっとそれは、お母さん世代があなた達世代のためにしなければならない、宿題なのかもしれませんね。

男女共同参画社会をめざす広報誌『ひらく』も、任務終了というのが、ある意味理想なのかもしれません。

娘の社会科見学で、こんなことを感じたのでした。

（宿題に追われる母）

「リーダーシップ」とは

平成25年、インターナショナル・スクールが軽井沢に開校する。そのサマースクールの様子が報じられていた。

参加したのは中学2年から高校1年までの10か国31名で、約2週間、全寮制で授業を受けたという。授業の中に「リーダーシップ」の体験学習が組み込まれていた。リーダーが目隠しをして腕を胸の前に組み、背中をぴんと伸ばして石段の上から後ろ向きに、一本棒の状態で石段の下にいる学生の腕の中に飛び込んでいく。

模範実技の後、学生が2人ずつペアを組み、段差のないところで同じことをする。踵を支点にして体を一本棒にして背中から倒れこむ、考えただけで身の毛がよだつ。ペアを組んだ相手が必ず自分の体を受け止めてくれるという確信がない限りできることではない。確信がなければ体は自然と受け身の姿勢になり、受け止めにくくなる。

この確信は、相手との対話から生まれてくる信頼である。信頼の上にリーダーシップが成り立つ。信頼が天性のものではない以上、リーダーシップもこうした日々の練習で獲得可能になっていく。

（玉川平生）

遠野ボランティア記

6月に岩手県遠野市へ災害ボランティアに行ってきました。

初日、早朝に大きな余震があり、新幹線を降りると在来線は朝から運休状態でした。それまで余震の度に電車が止まっていたらしく、地元の人は静かに不便を受け入れているようでした。振替え輸送バスでようやく遠野に到着し、災害ボランティアの中核「遠野まごころネット」で受付を済ませて夕方の集会に参加しました。内容はその日の各仕事の報告、翌日の仕事の募集等、初めて参加した者にもわかり易い流れです。

翌日は大雨で外仕事は休みとなり、屋内作業の写真班に応募しました。被災現場で拾い集めた大量のアルバムから一枚一枚写真の汚れを落とす仕事です。赤ちゃんの育っていく姿、結婚式の様子、楽しそうな旅行等、たくさんの思い出、記念、そして生きた証がどうか持ち主に届きますように、と祈りながらの作業です。多くの手順を踏んでやっと一枚洗浄するので、順番待ちの大量の写真がカビて行くスピードにとても追いつきません。それでも投げ出さず、諦めず、黙々と作業は続きます。誰かのために役立ちたいという素朴な思いが日本中から集まった現場を見、体験させて戴いた日々でした。

（ありんこパパ）

小平在住、在勤の女性を訪ねて、
そのいきいきした様子や元気の素を伝えます。

いきいきレディ27

ドーバー海峡横断 どこからうねりが来るかが分かる

津城（つしろ） 清子（きよこ）さん
（たかの台在住 主婦）

映画出演は想定外。
「スッピンだし水着だし。でも、これくらいのことに負けていてはドーバーを乗り越えられない」

水泳チーム織姫の2年間の練習とドーバー横断がドキュメンタリー映画になった。54歳から67歳までの女性6人が1時間ずつ交代で一人が2回から3回泳いだ。映画を観るうちに初めてドーバーを泳いだ津城さんに会いたくなった。

◆夫は山が好き

映画冒頭に織姫たちの短い紹介がある。津城さんは、ドーバー行きをまだ家族に話せないでいる、おとなしい主婦という風に映っている。映画後半で織姫メンバーが力強く泳ぐシーンに重ねて本人の言葉と家族がドーバー行きについて話す場面が交互に出てくる。津城さんの「泳いでいる時はすべてを忘れる」という言葉が流れた後、画面奥の台所で家事をこなす津城さんと居間で撮影カメラに向かって山登りについて語る夫が映った。

◆肩こり解消のため

津城さんは、夫の転勤の度に見知らぬ土地へ移動し10年程前に小平へ落ち着いた。転勤はある日突然にやってきて大変だったと言う。浜松では、肩こり解消のために申込んだ市民プール教室まであと2日という日に転勤が決まったそうだ。転勤先でバタ足から練習し、国分寺に移り住む頃には遠泳に興味を持つほど泳ぎが上達していた。チーム織姫に入って、波にのるように仲間と一緒にいる時間の心地よさも手に入れていった。だから、冬の海や夏でも冷たい川での練習も頑張ることができたようだ。

◆ドーバー横断成功

許可が下り、夜明けにおにぎりと稲荷寿司を持って織姫たちはドーバー協会の船に乗り込む。うねりがすごい。だが、津城さんは私に「自然と対話しながら泳ぐところが魅力です。どこからうねりが来るかが分かります」と事も無げに語った。船酔いに負けず、相棒の世話をする冷静な津城さんの姿を思い出した。津城さんは3回目に最終泳者として真っ暗なフランス海岸にたどりつき、「ここで失敗するわけにはいかない」と岩場を登って証拠に石ころを持ち帰った。

◆これから

チームでひとつのことを成し遂げるのに必要なことは何か。最終的には判断力と責任力だと思う。津城さんは、転勤の度にその能力を培ってきた。子育てと夫の世話との同時並行で引っ越し準備をこなしてきたのだろう。「機会があればドーバーにまた行きたい」と津城さんは即答した。

☆ドキュメンタリー映画『ドーバーばばぁ 織姫たちの挑戦』2011 カラー 116分
監督 中島久枝 制作 Duck Duck Goose

東日本大震災と男女共同参画の視点

3月11日の東日本大震災に対し、内閣府男女共同参画局は3月16日、「女性や子育てニーズを踏まえた災害対応について」（避難所等での生活に関する対応の依頼）を取りまとめ、避難所を管理する地方自治体等に働きかけを始めました。その内容等から、普段の生活ではわかりにくい「男女共同参画の視点」を見てみましょう。

○提供する物資に関して

生理用品、おむつ、粉ミルク、哺乳ビン、離乳食の他、女性など被災者の要望に耳を傾けながら選定する。

○避難所の設計に関して

①プライバシーを確保できる仕切りの工夫②男性の目線が気にならない女性専用更衣室、授乳室、入浴設備③乳幼児が安全に遊べる空間の確保④乳幼児のいる家庭を集めたエリアの設定。

○避難所の運営に関して

①女性の視点や女性の声や悩みを反映できるよう運営体制への女性の参画②女性職員を現地に派遣し、女性のニーズをくみとる③意見箱の設置④女性の医師、保健師や女性相談員による、悩み相談サービスの提供。

○女性に対する暴力に関して

災害現場や避難所で性犯罪や配偶者間暴力等の発生予防にむけて①警備強化②防犯ブザーの貸し出し③トイレの安全な場所への設置④男女別トイレ⑤女性への注意喚起⑥相談サービスの提供など被害者への支援。

○妊婦等への配慮に関して

①負担の大きなことをさせない②病院や産院への迅速な搬送など。

◇　◇　◇

支援物資の輸送を担当した航空自衛隊での実例を紹介しましょう。ある男性自衛官が女性被災者の要望をうけたことから、女性自衛官が欲しいものを聞き直接手渡す「GOYOLADIES」作戦が始まりました。この作戦の成功を契機に他の自衛隊でも同様のことが行われたそうです。

災害が起きたとき、軽視されがちなのが女性や弱者の声や悩み。これらを反映させた対応を行うことこそが、「男女共同参画社会の視点に立つ」ということなのです。

ひらく掲示板

表紙作品

「ありがたく，三拍子」（梅の木）

BON*作家　志村えみ（小平市小川町在住）

この夏、息子の使い残した青春18切符を手に東北の山をめぐった。宮城、岩手、青森、秋田、山形、福島…。新幹線は山を切断し、破壊して進むが、各駅列車は山をかわし、森をくぐって人を運ぶ。夏の草木は美しく、揺れる稲穂はまばゆい。白眼が緑に染まるほど車窓の風景に見とれた。ありのままの自然…というが、自然はのびのびと自由でありながら、大いなる均整の美にゆだねられ、ふところ、ふところに、なつかしい物語を抱いている。

志村えみさんのBONには、小さな鉢のなかに、命と自然のスケールが、ある。志村さんはBONの主人公を「植物」ではなく"はな"と呼ぶ。BONは、"はな"を纏足（てんそく）のように窮屈な器におさめない。鉢を選び、"はな"を植え、苔を生やして、待つこと一年。どんなに急いでも四つの季節をともに過ごし、"はな"の居場所を"はな"と一緒につくるのだ。

「"はな"の微妙な表情を感じとって"はな"を生かすことで、"はな"も私を生かしてくれるんです。」

BON作品は、ともに過ごした時間が枝葉を伸ばした姿。そして"はな"は現在進行形である。人の手に渡るときには、命と命の出会いを提供する思いだと志村さんはいう。

作品名は「梅三つ、実をつけてありがたく」「ひらくの表紙（拍子）にお声がかかってありがたく」「撮影日には晴天でありがたく」からきているとか。たしかに、雨あがりの五月晴れ、表紙撮影13年間の歴史の中で、ダントツの撮影日よりだった。

撮影協力：いろりの里（上水本町）
表紙写真：長塚秀人

＊BON　盆栽の手法と生け花の精神を絡み合わせた志村さんのオリジナルの言葉

トピック

男女共同参画のつながりができる

8月20日（土）午後2時から男女共同参画センター“ひらく”で男女共同参画推進審議会と男女共同参画推進実行委員会との交流会が開かれました。思いは同じでも、いままで別々に活動してきた人たちが初めて一堂に会し、それぞれの活動を発表しました。

小平の情報はココでわかる

青少年男女平等課	042－346－9618
男女共同参画センター“ひらく”	042－348－2112（青少年センターと兼用）
子育て・女性相談室	042－345－2415
子ども家庭支援センター	042－347－3192
ファミリー・サポート・センター	042－348－1780
NPO法人子育て広場「きらら」	080－5042－8245
こだいら就職情報室	042－344－1215
中央公民館	042－341－0861
市民活動支援センター	042－348－2104
こだいらボランティアセンター	042－346－1424
公益社団法人小平市シルバー人材センター	042－344－2120

●こだいらNEWS（小平市メールマガジン）
市ホームページから配信登録をすることができます。「公民館からの新着情報」にチェックを入れると公民館からのメールマガジンも届きます。他に防災緊急情報などもあります。

●小平市ホームページ
http://www.city.kodaira.tokyo.jp/

いちど来てみませんか？

小平市男女共同参画センター

ひらく

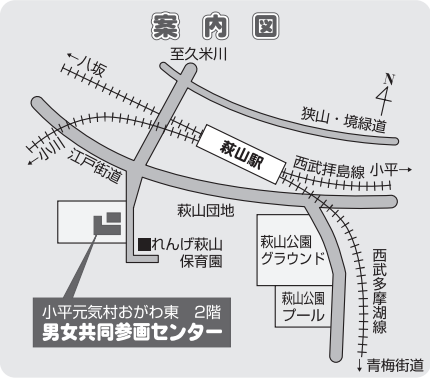
（愛称）

小平市男女共同参画センター

〒187-0031 小平市小川東町4-2-1
小平元気村おがわ東　2階
042-348-2112（青少年センター兼用）

西武拝島線・西武多摩湖線　萩山駅南口より徒歩5分
※駐車場に限りがありますので、車での来館はご遠慮ください

- ●開館時間　午前9時～午後10時
- ●休館日　火曜日・年末年始・奇数月の第2日曜日
- ●利用対象者　利用登録団体・個人
- ●問合せ先　次世代育成部青少年男女平等課　042-346-9618



行ってみました

特定非営利活動法人 シャプラニール=市民による海外協力の会

ボランティアはしたいが、何から始めていいかわからない。それが国際協力となると、とても遠くのことで自分は関わることができない。そう考えてしまう人が多いと思います。その「『遠い』を『近い』に。」をキャッチコピーに活動しているNGO団体があります。シャプラニール東京事務所に石井大輔さん(広報担当)をお訪ねして、その活動内容や市民が関わることの大切さについてお聞きしました。

◆「ステナイ生活」も買い物も国際協力のひとつ

国内の賛同者が不用品をシャプラニールに送り、シャプラニールはそれを買取業者に売って換金し活動資金として役立てています。不用品収集に参加する企業もあり、CSR(企業の社会的責任)になっています。この「ステナイ生活」という方法は気軽に国際協力ができ、しかも自分の生活を見直す機会になります。この他に買い物でできる国際協力としてフェアトレード(クラフトリンク)があります。南アジアの女性たちがつくる手工芸品を適正な値段で買い取り、販売をしています。これが女性たちの生活向上につながります。

◆家事使用人という「隠れた児童労働」

バングラデシュでは子どもも労働力のひとつです。言うことをきくという理由から雇い主は、家事使用人として幼い少女を雇いたがるという説明がありました。女性への人権意識が薄く一人での外出も難しい社会で、貧しい家の少女に教育を受ける機会は限られています。住みこみで朝から晩まで休みなく働かされ、雇い主やその家族から暴力をふるわれたりする場合もあるそうです。この活動が始まったのは、ストリートチルドレンの中に女の子が少ないという気づきがあったからです。少女たちのための支援センターでは、家事の訓練を口実に雇い主の了解をとり、現地のＮＰＯの協力を得て、少女たちにアイロンのかけ方や料理を教える一方、簡単な文字の読み書きや性教育の時間もあり、不当な扱いを受けないように配慮します。(詳細はブックレット『家事使用人として働く少女たちバングラデシュの隠れた児童労働』)

◆当事者を大事に

シャプラニール(=「睡蓮(スイレン)の家」という意味)の設立は1972年。主にバングラデシュへの支援を40年間続けてきました。その使命は「南アジアの人々の生活上の問題解決に向けた活動を現地と日本国内で行い、すべての人々がもつ豊かな可能性が開花する社会の実現をめざす」ことです。活動は「当事者主体」で行われ、時と場合によって支援の内容を変える「市民による」海外協力だという点に特徴があります。また「側面からの支援」とは、ただ単に物をあげるのではなく、その国の人たちが自分たちの暮らしを自分たちの手でよくしようとする、その動きを支援するというお話でした。

取材を終えて：シャプラニールの使命の中の「すべての人々がもつ豊かな可能性が開花する社会の実現をめざす」は、「ひらく」がめざす方向と同じだと思いました。

シャプラニール東京事務所

◆場所：〒169-8611 東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園内
◆HP：http://www.shaplaneer.org
◆電話：03-3202-7863 FAX：03-3202-4593
◆E-mail：info@shaplaneer.org/
◆火曜～土曜 10：00～18：00

○ 2009年から認定NPO法人となったシャプラニールへの寄付金には税の優遇制度が適用されます。

●市内にも国際協力の芽が育つ

小平市中央公民館の講座「私たちの地域からはじめる国際協力プロジェクト」からできたサークル、「こだいら国際協力プロジェクトSeed」の10人が8月16日から21日に国際協力の展示会と不用品回収イベントを企画・運営しました。サークルでは会員を募集中です。【連絡先】042-332-2097(渡辺)

公民館の萩元さん(左端)といっしょに

ひらくはココにあります。

男女共同参画センター"ひらく"、公民館(11館)、図書館(11館)、地域センター(18館)
福祉会館、総合体育館、児童館、健康センター、市役所1F・2F、東部・西部出張所、郵便局(17か所)
市内各駅(7か所)、八坂駅、萩山駅、東大和市駅

- 小川町 多加楽、手作りクッキーの店歩、商工会館、JA東京むさし、コーヒーロッジベル
- 小川西町 佐野商店
- 小川東町 ギャラリー青らんぎ、長江宴、ブレッドファクトリー510、カフェAir(エール)
- 上水本町 アトリエ・パンセ
- 津田町 ハタエコンサーン
- 学園西町 ビューティーサロンサンローズ、百の豆木、梁里館、美容室ヘアーグラシュ、鈴木小児科、本間歯科 ヘアーサロンサンライズ、あかね薬局、床屋のけんちゃん
- 学園東町 日本堂文具店、梅の里、アクティブスタジオ、りそな銀行小平支店、グエン・バン・カフェ おだまき工房、カシュカシュ、お化粧のしのざき、きそ歯科クリニック、ふく歯科、寝具センター丸新 ミサワホームイング一橋学園店
- 美園町 多摩済生病院、ラグラス、珈琲の香、POEM、永田珈琲、ルネこだいら、小平駅前クリニック
- 御幸町 ケアタウン小平
- 鈴木町 和菓子の玉川屋、きらら はうす
- 天神町 公立昭和病院、カフェテリアヴェルデ、ヘアーサロンひろ
- 大沼町 ガスミュージアム
- 花小金井 上原薬局、風のシンフォニー、辰砂(しんしゃ)

編集後記

●「おすそわけ」や「おさがり」・・・。今こそ、これらの温かくて美しい文化を見直す時では?ジェットコースターに乗っているかのような、過剰な消費社会は、もう疲れちゃいましたよね。(ま)

●地球上のいき物、その数144万種。人間もその1種にすぎない。地球という住処をシェアしている。分かち合いの精神はここにも必要だ。地球に生かしてもらっているという謙虚さとともに。(の)

●世の中は面倒くさいと思う人とそう思わない人でできていて、その割合は面倒くさいと思わない人が圧倒的に少ない。そんな彼等を取材した今回の『ひらく』。私にも面倒くさくないがうつってくれないかなー。(ks)